

神奈川大学 みなとみらいキャンパス

# 考古学

第6回(2023年5月24日)

講師 鳥越多工摩



縄文オープンソースプロジェクト(  
[縄文オープンソースプロジェクト](#) |  
[縄文文化発信サポーターズ \(jomon-supporters.jp\)](#))

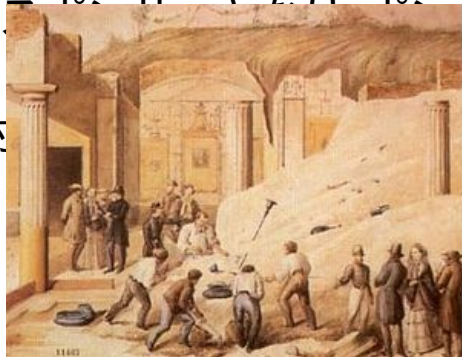
# 考古学の歴史

## 古典考古学

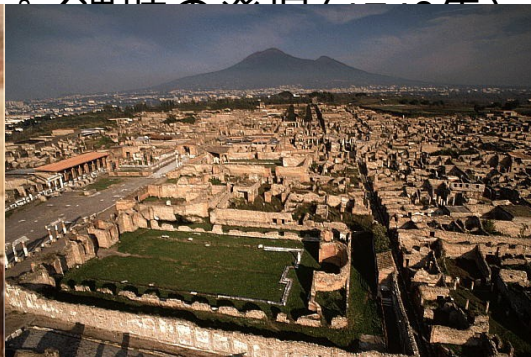
- 中世ルネサンス期(13C末~16C中葉)に好古趣味(antiquarianism)の流行  
上流階級の高物蒐集家(dilettanti)……古代の芸術品を収集
- 近代ヨーロッパ(17C中葉~19C)では「博物学」と「古典研究」といった二つの分野があった。  
博物学……自然界に存在するさまざまな事象を観察・記述→動物学・植物学・鉱物学・地質学・古生物学へ発展  
絶滅動物の化石とともに人工品の石器が発見された→太古に人類が存在(聖書の天地創造に反する)  
…… **先史考古学の胎動**(ネアンデルタール人など)  
古典研究……ルネサンス以来古典研究(文献史学)がさかんに行われた→古代ギリシア・ローマの遺跡・遺物の研究  
…… 古代ギリシア・ローマ時代の**考古学(archaeology)の始まり** ウィンケルマン(ドイツ)……彫刻研修  
・インカ、アステカ文明に対する興味……C. ゴンゴラによるテオティワカンのピラミッドの発掘(1675年)  
世界初の考古学的な発掘調査



テオティワカン



19世紀に発掘されるポンペイ



バージニアの塚の発掘調査(1784年)

年)

# 北欧考古学の発展

- スウェーデン……国家古物官任命(1630年)、博物館設立(17C後半)
- C.トムゼン(デンマーク)……3時代法を発表(1836年)  
石器時代→青銅器時代

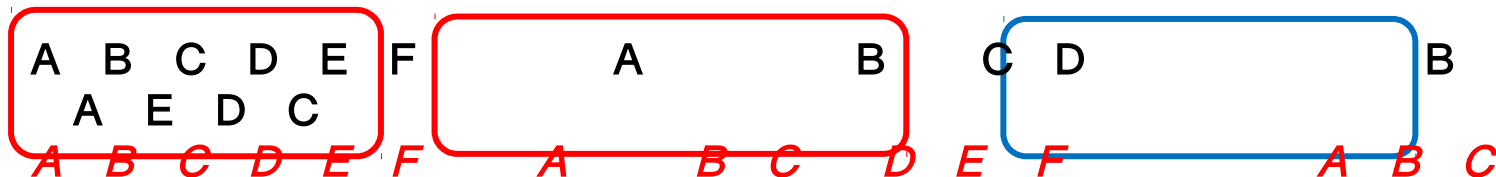
## →鉄器時代

- ラボック(英国)……石器時代を旧石器時代と新石器時代に二分
- O.モンテリウス(スウェーデン)……型式学的研究法(1870年代)  
型式学的方法(Typologische Methode)

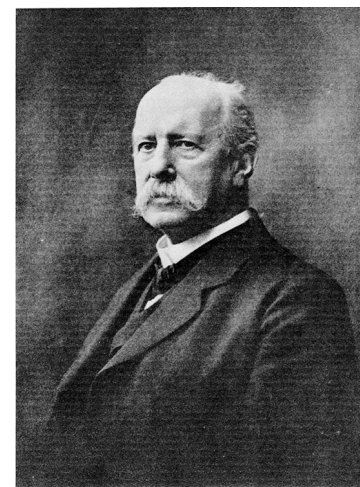
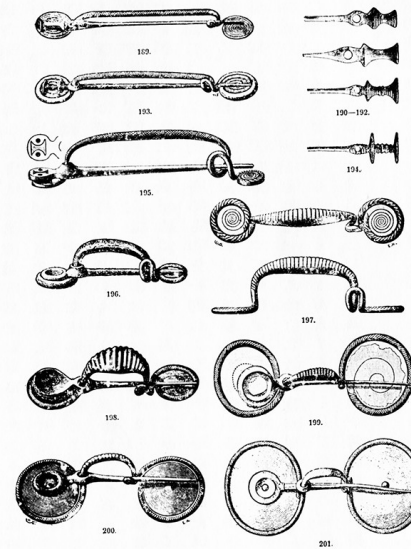
「進化の過程—換言すれば其系統—を知り、且型式がその特有の標準に由つて判断した場合に、如何なる順序によつて前後してゐるかを知らんが為め、武器・道具・装飾品・容器などを、その紋様と共に一つ一つ幾つかの重要な組列(Serie)に私自ら順序して見た。」

## 共伴する確率を高める必要性

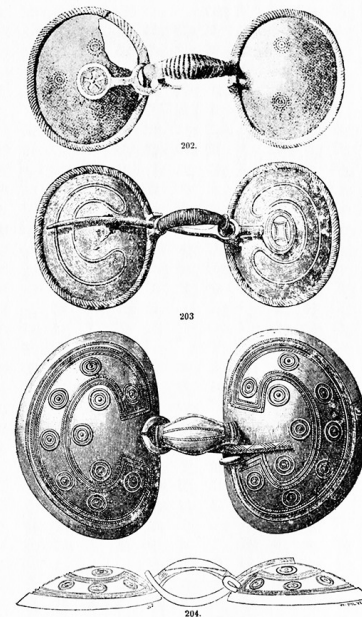
「若しもただ1回の発見物が、H型式の留針と、E又はF型式の容器を含んで居つたならば、それは実際はただ両方の型式が同時代ではなからうかといふ暗示を与へるに過ぎない。(中略)30回以上になると「蓋然性」といふ語の代りに「確実性」といふ語を使うことが出来、何等躊躇することなく、この型式の留針と容器とは実際同時代のものであることを主張することが出来る。」(モンテリウス 訳:濱田耕作 1903)



Christian J. Thomsen



Oscar Montelius



202-204. 青銅時代北歐留針

北欧の留針の型式変化



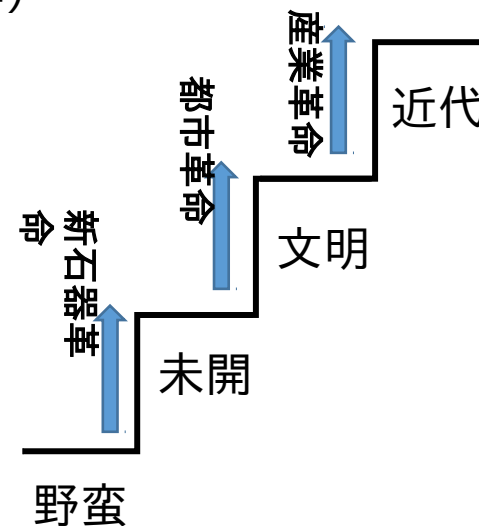
# マルクス主義考古学

- 史的唯物論の思想に基づいた考古学(20世紀前半～)
- 人間社会にも自然と同様に客観的な法則が存在しており、**生産力**の発展に応じて社会が発展していくとする歴史発展観により、原始・古代社会を研究する。
- 通時的变化を段階的「**発展**」として重視……野蛮→未開→文明
- **ゴードン・チャイルド**(オーストラリア・英国)
  - ……生産技術の発展に焦点をあて、ヨーロッパの先史社会の文化の**系統関係**や**伝播と自生**などの概念を用いて編年と

その解釈を行い、「なぜ文明は西アジアで発生したのか？」歴史哲学的な考察を行った。  
『ヨーロッパ文明の黎明』(1925年)  
『先史時代のドナウ川流域』(1929年)  
『人は人自身をつくる(邦訳:文明の起源)』(1936年)  
『歴史のあけぼの』(1954年)  
『考古学の方法』(1956年)

日本の戦後の考古学に  
多大な影響を与えた

旧石器時代……野蛮文化	
新石器時代……未開文化	新石器革命
銅器時代……高度未開文化	
青銅器時代……都市文明	都市革命
青銅器文明圏の拡大	
初期鉄器時代	
鉄器時代……文明の発展(政治・宗教・科学)	



ヴィア・ゴードン・チャイルド

Vere Gordon Childe

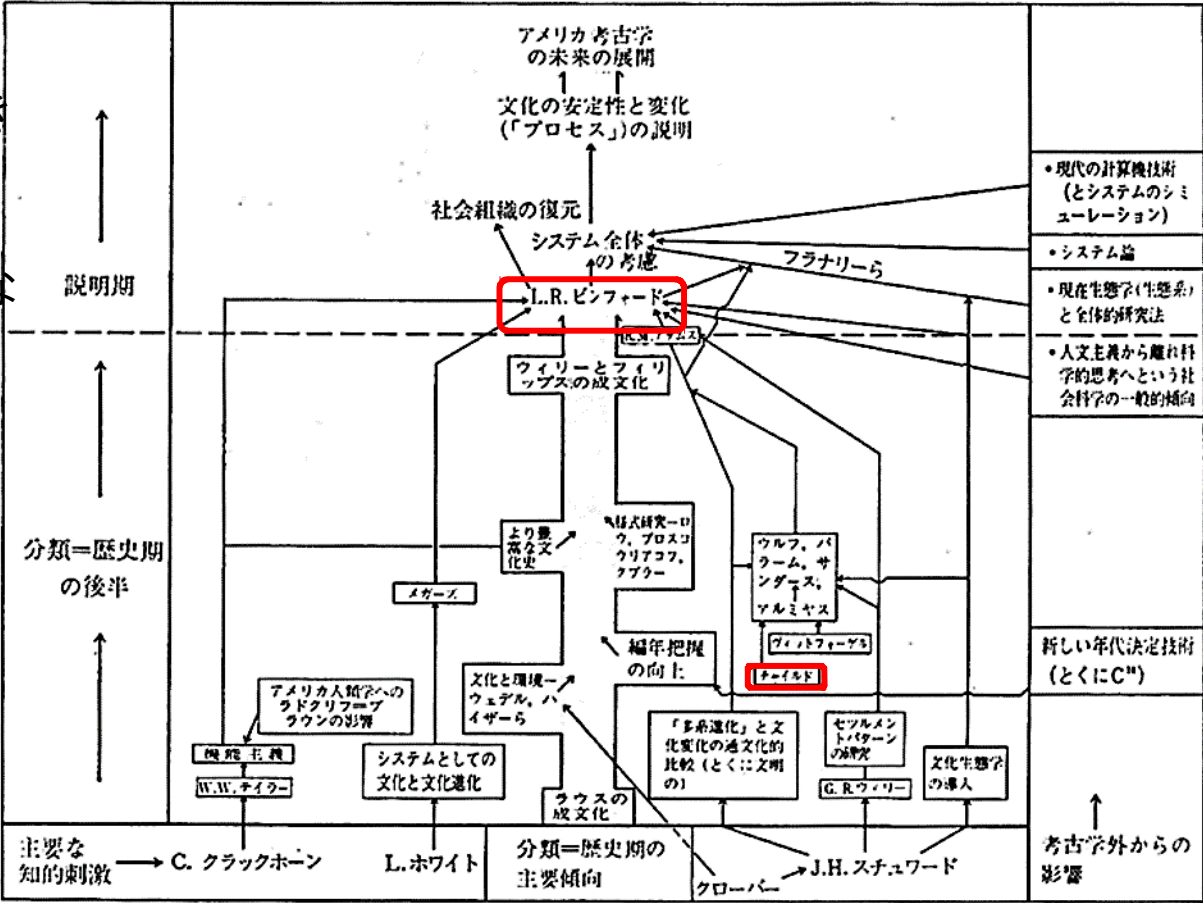
# プロセス考古学(ニュー・アーケオロジー)

- 1960年代～70年代にアメリカで始まった伝統的考古学の限界を打破することを目指した研究の潮流で、社会・文化が時間の推移によってどのように変化しているのか、そのプロセス(過程)を明らかにすることを研究目的とする。
- 新進化主義の影響を受け、**演繹的方法**を用いる。  
文化の変化は法則性があり、一般理論化して「説明」できると考える科学的思考である。
- 生態学、システム論、中位の理論(ミドルレンジセオリー)、民族学、統計学、コンピュータの利用(シミュレーション)**など、考古学以外の理論や技術を積極的に援用する。
- ルイス・ビンフォードが中心的役割を果たした。**  
技術的組織・フォレジャーとコレクターモデル  
埋め込み戦略など



Lewis Roberts Binford  
(1931-2011)

	プロセス考古学	伝統
的考古学		
考古学の特質	説明	
記述	文化プロセス	
説明		
文化史		
推理	演繹法	
帰納法		
有効性	検証	
権威		

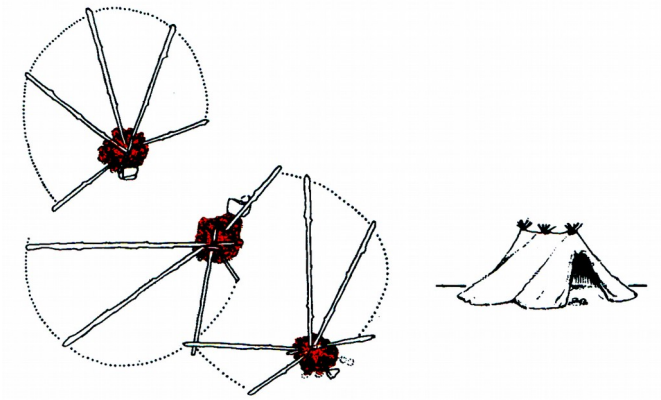


分類=歴史期後半(1940～60年)と説明期(1960年以降)のアメリカ考古学界における理論と方法の発展の歴史を示す模式図  
ウィリー・サブロフ 1974 訳:小谷凱宣

# プロセス考古学の説明

## パンスヴァン遺跡(フランス 1.5万年前)の解釈の違い

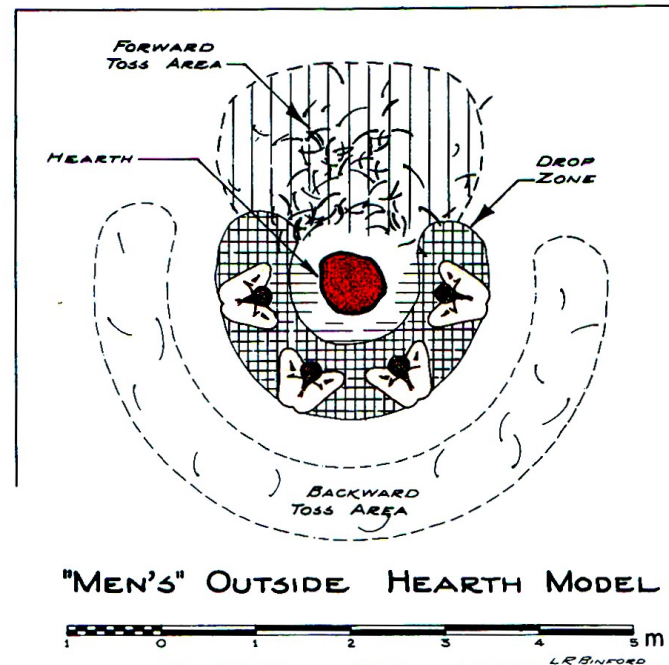
- 調査担当者のルロワ＝グーランは複雑な革のテントが存在したと推定した。(上)
- ビンフォードは現在のアラスカのヌナミュート・エスキモーの中で生活し、屋外炉の観察した。その結果、前後のトスゾーン(大きな骨)と、人々のすぐそばのドロップゾーン(小骨)があることを確認した。(下中)
- ビンフォードはヌナミュートの調査事例を援用して、「屋外炉モデル」を構築した。そして、パンスヴァン遺跡の3基の炉は屋外炉と推論した。(下右)



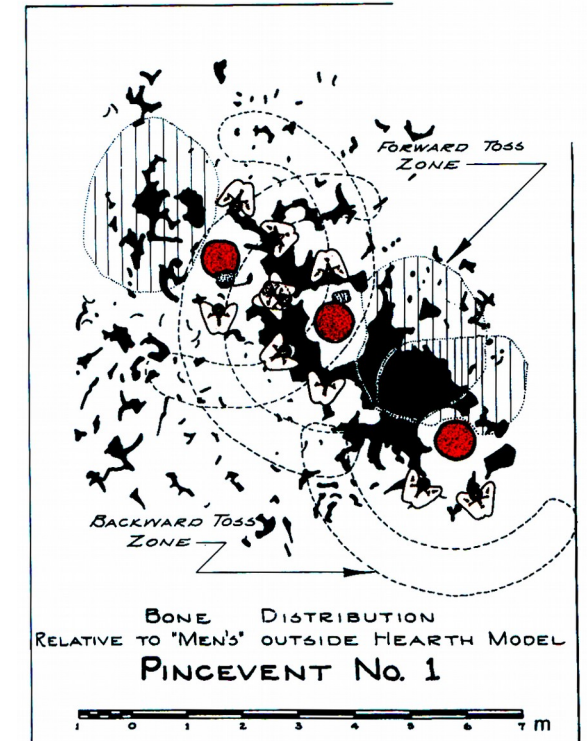
ルロワ＝グーランによる複雑なテントの推定



ナロ・ブッシュマン(ボツワナ1969年頃)の屋外炉も、ビンフォードの「屋外炉モデル」と合致する。



ヌナミュート・エスキモーの「屋外炉モデル」



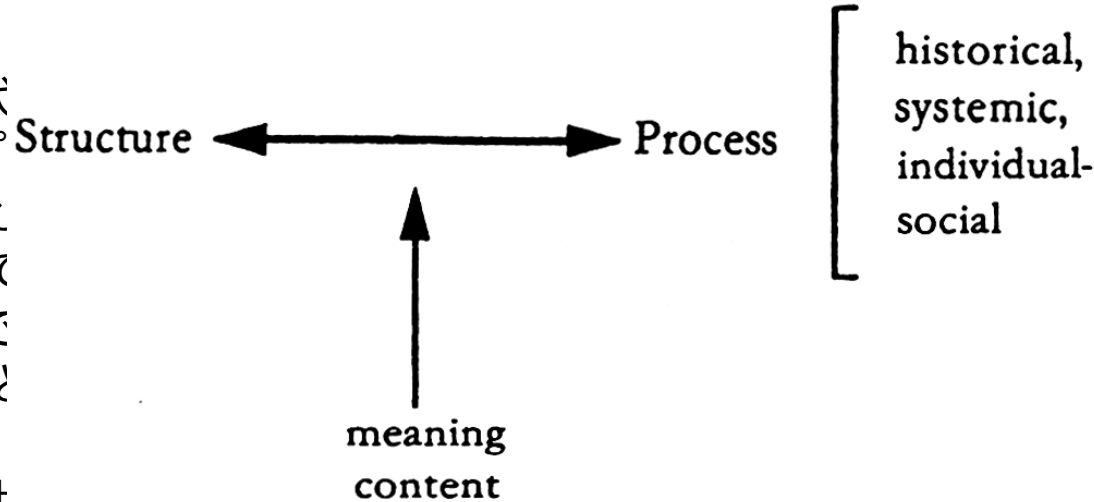
ビンフォードによるパンスヴァン遺跡の推定

C.Renfrew, P.Bahn 1991



# ポスト・プロセス考古学

- 1980年代以降のイアン・ホダー(英国)を中心とする英国の考古学の潮流 『過去を読む(Reading the past)』(1986年)
- 考古学的説明は行動のコンテキストと意味の関係からなされなければならないということ、考古学の観念論的な使用は実践者によって認識されなければならない(深澤百合子 1991年)
- ルーズで雑駁な概念である。プロセス考古学に対して、「ポストである」=「後発である」ことのみをその概念規定とする。「ポストモダニズム」というタームのものにルーズに包括される驚くほど多様な対抗的ミニ・パラダイム群に対比されるべきもの(溝口孝司 2006年)
- プロセス考古学の批判を通して誕生したポストプロセス考古学は事象の独自性、歴史性、認知、ランドスケープ、記憶、社会的再生産という諸概念に研究の重点を置く(坂口 隆 2007年)
- 1つのまとまった学ではなく、単にプロセス考古学とは違った研究方法を掲げたり 研究手段をとったりする考古学者の総称。歴史変革、社会進化の法則性を積極的に認めないこと、時代と文化の違いを超えて、世界は同じプロセスで進化するといった単純な考えは否定的。考古資料の解釈にあたっては研究者の主観を重んじ、同じ資料でも研究者によって解釈が違ってくことを重視(佐々木憲一 2011年)
- 過去の当事者たち〈彼ら〉が認識した世界像や観念を再構成し、〈彼ら〉の視点からその文化の中での意味を「解釈」しようとする立場(谷口康浩 2015年)



Ian Hodder

The domain of post-processual archaeology.